

東京佛光人、福島グリーンエネルギー農園の経済復興に賛同する

【福島＝人間社記者 如昱】

震災による東京電力福島第一原発事故から二年、現地の有志者は、津波や原子力災害にさらされ破壊された土地に、太陽光発電や植物工場を学ぶ場所を設立した。この長期に渡る人材育成計画を支援するため、東京佛光山の住職である覚用法師が、24日、NPO法人国際ブリアーの小笠原有美事務局長、国際佛光会東京協会精進会の瀧川和利会長ら一行を引率し、福島県南相馬市に車で向かい、責任者の半谷栄寿氏と第一回の交流を行うとともに、今年度の慈善金を寄贈した。福島がグリーンエネルギーで発展し、代々まで無事に暮らせることを期待するものである。

東京佛光人は車で6時間あまりかけ、ようやく「南相馬ソーラー・アグリパーク」に到着、半谷栄寿氏たちの出迎えを受けた。半谷氏は去年の12月の設立以降、日本全国各地から交流や見学の団体がたくさん来ており、なかでも台湾の佛光山、NPO法人国際BLIAはここを訪れた最初の国際団体で、佛光山や佛光人の支持に対して「限りない感謝の意」を表明した。

今年60歳の半谷栄寿氏は福島復興ソーラー・アグリパークの代表理事であり、プレゼンテーションの中で、2011年311東日本大地震による津波や原発爆発、放射能漏れは土壌や空気に深刻な汚染をもたらし、住民がふるさとを離れ、避難せざるを得なくなり、数ヶ月の間多くの人が毎日冷たいおにぎりだけでお腹を満たすという、過酷な生活を送ることとなったと述べた。

「自分は福島のために何ができるのか」と震災後再び故郷に戻った半谷栄寿氏は津波や放射能に破壊されたこの土地を復興の拠点とし、東京電力の事業開発部長だったころの専門知識を活かし、約2.4ヘクタールの敷地に「南相馬ソーラー・アグリパーク」を作った。太陽光から電気エネルギーを作り出す太陽光発電の力を小中学生に体験学習してもらえる「グリーンアカデミー」である。

「例えば、土壌や肥料の必要がなく、純粹に太陽光のエネルギーだけで野菜を栽培し、自然光や温度の制御だけで野菜が健康に育つ」と、半谷栄寿氏はこのような太陽光発電所や植物工場で1年間に32万トンもの野菜を生産する計画があることを紹介した。まさにこのように未来の主役たちを教育することで、将来、放射能の影響を免れることを目的に、「福島の次の世代が体験学習のなかでエネルギーについて知り、それをうまく活用し、大切にしてほしい」と述べた。

半谷栄寿氏の故郷に対する貢献は今では大きな反響となり、福島や日本全国で多くの人たちが太陽光発電やその教育価値を支持することを示している。最後に覚用法師は星雲大師の言葉を引用し「海水のあるところに佛光人あり、太陽の光あるところに佛光人あり」と話した。そして半谷氏に対し、私達は太陽のエネルギーが必要であり、精神的なエネルギーは更に必要であると話した。太陽の光に仏法の光が加われば、このような皆の利益となる事業は必ずや円満に成功すると信じていると述べた。

図 1

「南相馬ソーラーアグリパーク」責任者・半谷栄寿氏（左上一）のプレゼンテーション



図 2

後方テントの中で今年、震災発生時刻の3月11日午後2時46分に始めての種まきをし、5月11日ごろには収穫し、各地の市場に届ける予定である。



図 3

現場にある 2,016 枚もの太陽パネルで、毎日 500kw エネルギーが作り出され、その内の 100kw は工場用に供給し、残りの 400kw は電気会社に販売される。



図 4

空気を汚さずに、太陽発電で作られ、電気を充電したエコカーの社内はとても静かである。



図 5

覚用法師が救済特集の出版物を贈呈し、被災当時の救済状況を説明した。
半谷栄寿氏は一行の訪問に限りない感謝を示し、福島が一日も早く復興できるように、お互いに交流を深めていくことを希望すると述べられた。



図 6

覚用法師代表の NPO 法人国際ブリアーは今年度の慈善金を寄贈し、福島がグリーンエネルギーで発展し、代々まで無事に暮らせることを期待する。
前列右から半谷栄寿氏、覚用法師、如昱法師、妙琛法師
NPO 法人事務局小笠原有美氏（後列右から四番目）

